琉球大学学術リポジトリ

沖縄，古宇利島と塩屋湾のウンジャミの祭祀植物

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2020-10-14 キーワード (Ja): リュウキュウボタンヅル, クスノハカエデ, 植物方言名, ウンジャミ, 祭祀植物の繋がり キーワード (En): Clematis grata var. ryukyuensis, Acer oblongum ssp. itoanum, Plant dialect name, Unjami religious service, Relationship of the religious services plant 作成者: 新里, 孝和, 陳, 碧霞, 芝, 正巳, Shinzato, Takakazu, Chen, Bixia, Shiba, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46990

沖縄，古宇利島と塩屋湾のウンジャミの祭祀植物

新里孝和[1*]，陳　碧霞[2]，芝　正己[3]
[1]国頭村文化財保存調査委員，[2]琉球大学農学部亜熱帯地域農学科，[3]琉球大学名誉教授

Plants used during Unjami religious services in Kouri Island and Shioya Bay of Northern Okinawa

Takakazu SHINZATO[1*], Bixia CHEN[2], and Masami SHIBA[3]

[1]*Kunigami Village Cultural Properties Preservation Survey Member,*
[2]*Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus,*
[3]*Emeritus Professor, University of the Ryukyus*

キーワード：リュウキュウボタンヅル，クスノハカエデ，植物方言名，ウンジャミ，祭祀植物の繋がり
Key words: *Clematis grata* var. *ryukyuensis*, *Acer oblongum* ssp. *itoanum,* Plant dialect name, Unjami religious service, Relationship of the religious services plant

*Corresponding author (E-mail: shinri.takakazu@gmail.com)

1. 古宇利島と塩屋湾の概要

沖縄島北部～中部地域には年間行事の神祭にシヌグとウンジャミがあり，部落によって，国頭村安田区のように大シヌグと小シヌグ（シヌググァー，ウンジャミ）が交互にそれぞれ隔年で行われる所と，伊平屋村のように我喜屋区でシヌグ，田名区でウンジャミと別々に行われる所もある [1,2,3]．ウンジャミ祭祀は海神祭ともいわれ，塩屋湾ではウンガミと称している．ウンジャミ（海神祭）は [4]，大宜味村字塩屋付近，字謝名城，田嘉里，名護村字名護，今帰仁村字今泊，古宇利，本部村崎本部，国頭村字安田，安波などにて行い，最も盛んなるは塩屋付近にして名護これに次ぐとされる．今回は，古宇利島ウンジャミと塩屋湾ウンガミを調査した．図 1 から，古宇利島は海を隔てて塩屋湾のおよそ北西 8 km の地点にある．

古宇利島は今帰仁村の一区である．地名辞典を参考にすると [5,6]，今帰仁村は旧今帰仁間切の一村で，本部半島の北側に位置する．今帰仁間切は国頭方九間切の一つ，1666 年まで伊野波間切（のちの本部間切）を含み半島の大部分を占めていた．名称は，伊麻奇時利（イマキジリ「海東諸国記」1471 年），みやきせん（「おもろさうし」）がみえ，絵図郷村帳で崎本部村・伊野波村・具志堅村・今帰仁村・仲尾次村・天底村・運天村・沖ノ郡島（古宇利島）など 36 か村，のち一部の村が羽地間切，本部間切，現名護市への管轄替え・移村，また再度当間切に移入さらに新しい村の成立などがあり，1719 年頃は 20 か村となった．

1908 年（明治 41 年），沖縄県及島嶼町村制施行で 16 か村（字）をもって今帰仁間切が国頭郡今帰仁村と改称される．

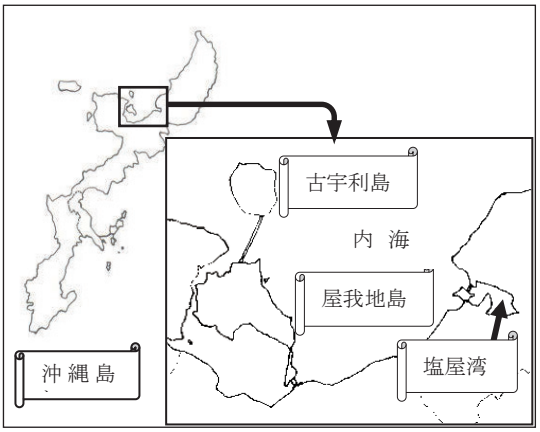

図 1　古宇利島と塩屋湾の位置

古宇利島は今帰仁村の東岸，本部半島の運天港からほぼ北東約 2 ㎞の洋上の離島である．島はほぼ円形で，南北約 2.1 km，東西約 1.9 km，周囲 7.88 km，面積 3.12 km^2，海抜最高 106.9 m，主に第 4 紀の琉球石灰岩（隆起サンゴ礁）からなる小低島である．

古宇利原遺跡は貝塚時代前期からグスク時代の遺跡で，荻堂式土器・大山式土器・室川式土器，宇座浜式土器・奄美系土器，輸入陶磁器などが出土している．島にはナナムイ・ナナタキと呼ばれる 7 つの御嶽があり，マーハグチ・ハマンシー・プトゥキヌメーヌ御嶽は沖縄における人類発祥地であるという神話がある．「太古この島に，男女二人の人が棲んでいた．二人は裸體にて恥づる事もなく，毎日天から落ちる餅に，何事もなく養はれ，その残りをも打ち棄てゝ暮らしてゐたが，いつの間にか智慧付いて，その残りを貯

え，又蒲葵の葉を採りて掌を作り恥を匿すやうにもなった．その時から，天の餅も落ちて来なくなり，二人は自ら苦しみて食物を索めねばならなくなった．そこで二人は悲しみて“たふたふ前さり　たふたふ前　太餅ヤト餅，賜へめしょれ　赤螺拾うて　おしゃけやべら”」[7]と謡った．クバの葉で陰部を隠すようになったのは，海馬（ジュゴン）が交尾するのを見て男女の交わりを知ったからであるという．

この島は方言でフイ，フイジマ，クイジマと称され，「沖之郡島」（琉球国高究帳），「沖ノ郡島」（正保国絵図），「コホリ」（慶長14年琉球渡海日々記），「郡村」（由来記），「古宇理村」（当時用候表），「古宇利邑」（球陽）があるとされる．島は明治期になり，士族などの移住により頂上部と北側にウイバル（上原）・シチャバル（下原）の屋取が形成される．1644 年に烽火の制が布かれると，標高約 100 m の最高地にトゥーミャー（遠見台）が設置され，島は航海の重要な目印となり，伊是名島，伊地村（国頭村）の烽火を受けて今帰仁に継いだ．戸数―人口は 1880 年（明治 13 年）123-539，1903 年 131-650（うち士族 8-60）となっている．水利が悪くて水田がなく，農漁兼業で，主な農産物はサトウキビ，イモ，スイカ，カボチャ，葉タバコ，海産物はアジ類，ベラ，ウニ，モズクなどである．

新城徳祐資料の 1958 年の調査によると[8]，この島は昔から今帰仁間切に属し，代々の今帰仁間切の地頭代の御掛島で，地頭代を勤めた人たちの屋号は「フイ屋」とか「前（メー）フイ屋」などというとあり，フイ，フイジマと呼ぶのはその名残であろう．島の人口は 1989 年 360 人余[9]と 1930 年の約半数となり，2019 年 4 月現在の今帰仁村住民基本台帳によると 365 人（男 216 人，女 153 人，うち外国人 5 人）で約 30 年間は同じである．2012 年の村政要覧をみると，ウンジャミやタキヌウガンなど 17 の祭祀があり，遠見台やいくつかの観光地また 7 月のウニ漁の時に島は賑わう．古宇利島は 2005 年に長さ 1,960 m の大橋で名護市屋我地島と結ばれ，さらに 2010 年にワルミ大橋が開通し今帰仁村と連結された．橋頭の海岸部には駐車場や土産品店ができて，島への人の出入りが多くなり観光で連日来訪者がいる．

大宜味村は沖縄島北部国頭郡の一村，通称山原地域の名護市羽地地区に続く農山村で，北側に沖縄島の森林を抱える国頭村，中央山稜を挟んで東側に東村がある．既述のように地名辞典[5,6]を参考にすると，1609 年（慶長 14 年）には国頭方羽地間切・国頭間切に属していたが，1673 年（康熙 12 年）に羽地間切と国頭間切から一部の村を割いて田湊間切が設置され，のち大宜味間切と改称された．大宜味間切は，首里から間切番所のある塩屋村まで距離 20 里 5 町余（約 79 km）の地にある．「球陽」尚貞王 21 年（1689 年）条によると，「大宜味郡塩屋村」に船を修造するために必要な鉄釘を造る小舎が設けられたが，たちまち消失したらしい．また「球陽」尚敬王 23 年（1735 年）条によると，大宜味・羽地・久志・国頭の 4 間切にはわずかに美材を残すのみとなっていたので，首里王府は法司蔡温に官僚に対して山林の法を教示するように命じている．

大宜味間切の王府への貢納物は塩屋村に集積され，塩屋湾から今帰仁運天に運ばれた．1753 年（乾隆 18 年）から，構いの検者が材木を積んだ船の荷改めをするようになった．大宜味間切は首里から遠隔地にあるが，山林や田畑や塩など，物資生産の村として王府は種々関与していたことが察せられる．

1908 年（明治 41 年）沖縄県及島嶼町村制施行で大宜味村となり，渡野喜屋・田港・塩屋・根路銘・大宜味・田嘉里など計 10 字で構成され，1911 年字塩屋にあった間切番所（のち村役場に改称）は字大宜味に，のち字大兼久に移転した．明治期に士族が移住して形成された屋取部落の大保が 1924 年（大正 13 年）頃に字田港から分離して単独の字となり，1930 年字田港から分離して字屋古が成立，1946 年旧渡野喜屋が字白浜に改称するなど，分離字や開拓移住した新字地があり現在 17 字となっている．

人口は，1880 年[6]田港 272 人，塩屋 846 人，屋古 120 人で，1984 年[10]田港 203 人，塩屋 754 人，屋古 60 人と減少傾向がみられ，さらに 2017 年（平成 29 年）現在[11]田港 91 人（世帯数 54，男 58，女 33），塩屋 581 人（世帯数 262，男 293，女 286），屋古 115 人（世帯数 47，男 56，女 59）となり，塩屋湾岸域の人口減少が続いている．

塩屋湾は西岸の東シナ海に注ぐ大保川の比較的大きな湾-奥行約 3 km，幅最大約 1.3 km，周囲約 8 km-をもち，湾の入口北岸に字塩屋があり，湾岸沿いの内陸東方に字屋古，字田港が隣接し，対岸に字白浜がある．大宜味村の主産業は農業で，サトウキビ，パイナップル，柑橘類，豚があり，塩屋湾ではマダイ，ハマフエフキ，スギなどが養殖されている．「喜如嘉の芭蕉布」および田港・屋古・塩屋・白浜の 4 部落を中心に行われる「塩屋湾のウンガミ」は 1997 年国指定重要無形民俗文化財になっている．1963 年（昭和 38 年）塩屋大橋の建設によって 8 km ほど迂回する湾岸道の距離が短縮され，さらに 1999 年現在の大橋が完成する．1993 年「長寿の村日本一」を宣言，高齢者は社会活動に積極的に参加し，伝統的食生活を受け継ぎ，芭蕉布・シークヮーサー・ぶながや（森の精）の里を打ち出し，塩屋湾ウンガミや他の文化財・自然など文化遺産を継承し，ツーリズムと民泊事業を推進して村の活性化を図っている．

2. 古宇利島と塩屋湾のウンジャミ

今帰仁村のウプユミは一年中でもっとも重要な祭祀とされ，今泊，古宇利ではウンジャミ，他ではウプユミとも称し，ノロの管轄する地域ごとに行われる[5]．今帰仁村史[12]によると，古宇利島のウンジャミは旧 7 月の盆の後にくる最初の亥の日に毎年行われ，司祭するのは，女神人 13 人，男神人 4 人と決まっていて，神人は 1 人を除き全員白衣を着け，女神人はリュウキュウボタンヅルを頭に巻いてハーブイ（冠）とする．行事では，空から餅が落ちてきた状況と最初の男女の交わりが儀礼的に再現されていたが，現在は男女の交わりの儀礼は行われていない[6]．

古宇利島のウンジャミ祭祀の経過や内容は今帰仁村歴史センターの仲原弘哲らによって 1989 年～1992 年に調査され[13]，一連の論文の中で 1919 年（大正 8 年）～1989 年（平成元年）における祭祀の変遷が記録されている[14]．2018 年 9 月 4 日（旧暦 7 月 5 日，亥），ウンジャミ祭祀を調査した．その日は祭祀の撮影をする写真クラブのメンバー約 50 名，学生約 15 名，天底小学校 6 年生約 25 名の大勢の参加者がいて，個人の写真撮影や聞き取りは難航した．午前 10:00 頃，アサギに女神人 5 名，男神人 2 名が座りウンジャミ祭祀が開始される（1989 年[13]は午後 1 時 10 分開始，

白衣装の女神人９名，男神人２名，その他の女性数名）．

女神人は白衣装を着け，リュウキュウボタンヅルのハーブイを頭に被る（図２），履物はスニーカー1 名，ゾウリ４名，男神人２名は普段着でハーブイも被っていない．島線香：盆に盛った米に 1 本，前方に据えた小石に２本＋半分の３筋．立ち動いて拝むときに女神人の手に持つ棒は白紙の御幣を付けたもの２本（中老の神人），旗を付けたもの２本（若い神人），御幣と旗を付けたもの１本（高齢の神人），男神人は中老の神人と同じ旗を付けたもの 1 本．高齢の女神人の棒と旗は古いもので，若い女神人の棒は最近店で購入した新しいもの，昔は御幣はなかったらしい（図３）．

御願が済んだ後，アサギ庭で女神人５名とハーブイを被った男神人１名が東側に開いた１辺約３ m のコの字型の周りを７回往復して両側で拝む，コの字型の角では各回とも礼をして進む（図４）．コの字は網の形で魚を囲み入れているような感がする．コの字型の動作は神遊びらしい[15]．

図２ リュウキュウボタンツルのハーブイ
（古宇利島 2018 年９月４日）

図３ 御幣をつけた棒を持つ女神人
（古宇利島 2018 年９月４日）

10:15，女神人 1 名が棒の先に白い紙で包んだ供え物（モチ[14]）を 3 個束ねたものを挿して立て，その先を廻して振る．最後にその供え物を男神人が突いて落とす．膳の紙で包んだ供え物を 1 個ずつ女神人に配る．

10:20，アサギに隣接する民家（フンシヤー，古宇利宅[14]）の屋敷内に移動，祠で拝み，舟形に繋いだ 2 本の縄の中で 7 回舟漕ぎの所作をする．

10:30，神道を通り海岸沿いにあるオミヤ（クワッサヤ，シチャヌアサギ[14]）に降りる．南の海側に向かって拝む．オミヤの前にコの字型に白線を描いた周りを往復して拝む，往復ともコの字のコーナーで礼をする．供え物と線香はアサギと同様である．コの字型は舟の形ではないということである．

図４ コの字型の線を回りながら拝む
（古宇利島 2018 年９月４日）

その後，海岸の隆起サンゴ石灰岩のシラサへ移動し，岩上に立ち大宜味村塩屋に向かって拝み，舟漕ぎの所作をする（図 5）．10:45，クワッサヤに戻り，舟漕ぎの所作をやって，ウンジャミ行事は終了する．神人たちは頭に被ったハーブイを取ってテントの中に置くが，特に意味はないということである．

図５ 海岸の石灰岩上で塩屋に向かって拝む
（古宇利島 2018 年９月４日）

一方，これまでの研究報告から塩屋湾ウンガミは[6]，古宇利島と同じように毎年旧暦７月盆明けの初亥の日に，田港・屋古・塩屋・白浜の 4 部落を中心に行われ，隔年ごとにウグヴンマール（祈願年）とウルイマール（踊年）があり，豊漁ばかりでなく豊作をも願い害鼠・害虫・害獣を払うなど，さまざまな内容が盛り込まれている．早朝に田港の神アシャギでノロによる神迎えがあり，屋古の神アシャギに移って神遊びをし，塩屋へ向かう．途中ノロを乗せてハーリーが行われ，最後に塩屋の浜で神送りの祭儀がある[5]．また大宜味村史（1978 年）[12]から祭祀の大略を述べると，ウグヴンマールは

ハーブイマール，ウルイマールはウドィマール・ワラビミキマール・チヌマキマールといい，ウグゥンマールはヌルまた神人たちの祈願や供え物が多くなり，ウドィマールは神司が簡略され塩屋で踊り田港と屋古でサーサーが行われる．

ウンガミの前夜はウンケーで神人の元屋に集まり，神屋あるいはパシロ（戸走口）でニレーの神を迎え明日のウンガミを告げ衆人万人に拝まれるように案内する．現在4か字は大保・押川・江洲も含めるが，この 3 字はハーリーに乗るだけでアサギの神奉には加わらない．田港アサギでは，神人はタンナ川で水撫レーをし，ウンケー酌をして，ヌルが酒を盃に注いで祭りの始まりを告げる．屋古アサギでは，アサギの広場に太い柱を立て，それを中心にクムー（藁で編んだ日よけ）が張られる．ヌルとそれぞれの神はタムトに島方は太柱を囲んで座り，ヌルのウンケー酒が始まりヌルに花米と酒を供えてウイトケー（盃を交わす）をする．ここではアシビ神とハーリー神に分けられ，アシビ神はヨンコイヨンコイと唱えながら太柱を途中で白衣裳に着替えて 7 周，ヌルも白衣裳に着替え，2 回目は 5 周する．しめくくりは神ウスイで，若ヌル，大勢頭，スリ神の 3 人が山に向かって地面にうつ伏せになって拝み，ヌルがススキの束で 3 人の背中を「ウーシー」後方のメービーが「ワッサレー」と叩き 3 回くり返し唱える．それが済むと駕籠に乗り，ハーリー神はフルガンサに待機しているハーリーに向かう[12]．

「塩屋のハーリーは，殿廻いに陸を駕籠でいく祝女たちと伝馬で入江を進む神人が外海の浜で合流し，鯨捕りの真似や神送りを演じたのに伴う行事で，しかも始まってからまだ六十年ぐらいにしかならない．古宇利島でももとは掟（区長）や祝女をのせた舟を岸によせては沖へ押しやること七回に及んで，舟をくつがえして掟や祝女を海に放り出すことが豊漁になるという行事であったという．」との記載がある[16]．

2019 年 8 月 18 日（旧暦 7 月 18 日，亥），ハーリー前までの塩屋湾ウンガミを調査した，植物の学名は塩屋湾および古宇利島とも初島・天野 [17]による．天気予報は雨であるが，9:20，田港部落へ着いた時は汗ばむほどの晴天で海浜に準備されているハーリー船が眩しく映えた．公民館は受付や祭事の用意をしている若い男女で賑わい，活気があり，田港アサギの屋根はクロツグの葉が 2～4，5 重に張られ，内の床はバナナの葉を表にして 1～2 重に敷かれていた（図 6）．見学客と話している 60 歳代のミカンづくりをしているという男性は，このアサギは来年には国の予算で新しく作りかえられると話した，アサギの柱はブロックで斜面の上が 7 段，下が 7.5 段である，彼は屋根を葺いたというが，クロツグの方言は知らず，何名かの知人にも訊いていたが誰も知らなかった．「山原では普通マーニー，またはマーニと呼んでいる」と言うと，彼はマにアクセントをつけて「マーニらしいよ」と周囲のみんなに告げた．今では，部落の植物の方言名と民俗を知る人を見つけるのは難しそうである．

図 6　田港アサギ（屋根はクロツグ，床にバナナの葉が敷いてある．田港 2019 年 8 月 18 日）

アサギのブロック柱に表 1 の『日程表』のポスターが張られ，次のように記載されている（本報告上，不要な部分を省略する）．

ウンガミの行事開始は，たぶんノロの不参加（高齢で体調不良と聞いた）でポスターの予定時刻より大分遅れた．見物客は開始前は 30 名くらいとみていたが，行事が進行するとすぐにおびただしいカメラ数になっていた．

11:10　田港ヌン殿内で拝みが始まる，男 2 人（30 歳代，50 歳代くらい）．隣にある井戸を拝む．黒平線香は殿内も井戸も 3 列 2.5 本である．小太鼓を5，6回たたく．拝殿には，香炉の左右に先が二叉の槍状の棒が 2 本ずつ左に櫂 1 本を立て，小太鼓 1 個が据えられている．男性 2 人が皿に盛られた米に線香をたてて拝みをする，ついで 1 人が右方の小さな掘り井戸に線香をたてて拝む．線香は 2 か所とも平黒線香 3 列 2.5 本ずつである．男性が小太鼓を 5，6 回叩いて，11:20 田港アサギに移動する．

11:24　田港アサギの内に部落の婦人会 7 人が入り，米，酒，神酒などを準備する．内のバナナの葉の上に 4.5 畳のビニール製ゴザが敷かれている．途中，天気予報の通りに雨になったが行事は何事もないように進行する．40 歳から 60 歳代の女神人 3 人が山手に向かって座る（図 7）．ヌン殿内にいた男 1 人が小太鼓を持って入る．

図 7　田港アサギ内の拝み（田港 2019 年 8 月 18 日）

図 8　ワラで編んだクムー（屋古アサギ 2019 年 8 月 18 日）

11:35　女神人は茶色の芭蕉着ふうの着物をつけ，頭に白い長い鉢巻を巻き，拝みをする．著者の 1 人新里は，雨の中次の屋古に向かう．

12:16　屋古に，田港から男が小太鼓をたたきながら，駕籠 2 挺やってくる．屋古アサギは，庭（アサギの前庭）にクム―（蜘蛛の巣の意という．図 8）と呼ばれる藁で組んだ網状のものが日覆のように，中心の柱から四方に張り巡らされ，その下にバナナの葉が敷かれている．

表1　2019 年塩屋湾のウンガミの日程表

「大宜味村塩屋湾のウンガミ 2019」ウイマール（踊り年）

期日：2019 年（令和元年）8 月 18 日（日）　満潮　8:24・21:10
旧暦：7 月 18 日　ひのと　い（七赤）赤口　　干潮　2:31・14:50

開始時刻～終了時刻	内容
10:30～11:00	田港のヌン殿内にてノロの山城トヨさんが祈願（ウガン）シマンホウも一緒に行う．宮城，新城
11:10～11:30	田港アサギにてウガン（ノロ，神女たち）田港婦人会が，アサギに来た方々に神酒を振るまう．
11:38～12:20	田港アサギを出発（神女）→　屋古アサギに向かう．
	シマンホウを先頭に塩屋湾の海岸沿いを駕籠かつぎが神女を駕籠に乗せて屋古アサギまで運ぶ．
12:20～13:20	屋古アサギにて祈願
	アシビガミはヨンコイ，ヨンコイを唱えながら支柱を回る．
	最初はハーブイをかぶり，弓を持ち，イツ衣装であるが途中から白衣に着替えて回る．
	支柱を回る回数はシマンホーが小石で数える．
	ヌルが神ウスイを行い締める．
13:30～14:00	屋古アサギを出発（神女は駕籠に乗る）→　塩屋（シナバ）に行く．
	爬竜船に乗る神女（ファーリーガミ）はフルガンサーに行く
	田港，塩屋，屋古の爬竜船はフルガンサーに集合
	爬竜船の出発と同時に駕籠かつぎは神女を駕籠に乗せ塩屋（シナバ）に行く．
14:00～14:25	爬竜船の競漕（御願バーリー）対岸より屋古，塩屋，田港の 3 組が競漕
	最初はフギバン（20 人乗り）．最後はウフバーリー（40 人乗り）
	神女たちはシナバにてファーリーガミを迎える．
	対岸の塩屋（シナバ）にて各村の婦人たちが迎える．『海に入って』
14:20	屋古アサギから塩屋に駕籠が到着．
14:20～14:35	爬竜船の競漕が終わるとナガリ（兼久浜）に神女は移動
	シナバ（塩屋）から神女は駕籠に乗り兼久浜に向かう．
	ナガリにて祈願．ニレー（西の海）古宇利島方向
	シマンホー　又ザイでイルカを捕るしぐさ
14:35～14:50	兼久浜からシナバ（塩屋）に戻る．
	バーシのウムイ　ノロを中心に神女たちが祈願．
15:00～17:30	奉納角力が始まる．

13:00　女神人が白衣を着け，頭に白鉢巻をする．赤瓦屋根のアサギの前に，バナナの葉の軒（幅 1m，長さ 4mくらい）が作られ，その下に敷かれたバナナの葉に女神人 2 人が海に向かって座り拝む，男女 10 名ほどの訪問者に神酒を授ける．前庭のクム―の下のバナナの葉の敷物に座っている，白衣装に白鉢巻をした女神人を男性訪問者 2 人が拝み神酒，米を授かる．他に薄い青衣装（イルイショウ [18]），イツ衣装；当日のポスター）に紫鉢巻をした女神人がおり，中心の柱に向かって男性 2 人が座っている．

クム―は，中心の柱から周囲に渡している綱に藁数本ずつ網から網に結び，綱間が広いものでは双方からの藁を間に交差させて結んでいる．この有様が蜘蛛の巣に似ていることから名付けられたのだろう．

13:12　青衣装に紫鉢巻の女神人が，曝したノシラン（*Ophiopogon jaburan*（Kunth）Lodd.，図 9）のカーブイ（図 10）を頭に被り手に弓矢をもってヨンコイ・ヨンコイをする．カーブイをした女神人は，柱を囲んで座っている男性 2 人の周りをヨンコイヨンコイを唱えながら，

右回りに左手を肩の高さ右手を下げて弓矢をもち斜め上下に振りながら 7 周する．

13:20　2 度目のヨンコイをする．女神人は色物の衣装から白衣装に着替え白鉢巻にノシランのカーブイをして，1 度目と同じように男性 2 人の周りをヨンコイヨンコイを唱えながら，右回りに 5 周する（図 11）．13:30 に終了，一行は塩屋に向かう．

図 9　ノシラン（田港 2019 年 10 月 18 日）

図 10　ノシランを曝して作ったカーブイ
（屋古 2019 年 8 月 18 日）

図 11　ヨンコイ（屋古 2019 年 8 月 18 日）

今年はノロがいないので，例年の祭祀植物による祓いの所作ができないという．準備している祓い用の祭祀植物の束を見せてもらうとススキとクスノハカエデである（図 12，図 13）．屋古の植物方言名は，ススキがグシチ，またジシキ・シバ（福地保善：昭和 25 年生，屋古在）でシバは柴差しに使うからといい，クスノハカエデがマンモク（當山全信：調査時 95 歳，田港在）またセッケンバー（當山・福地談）でセッケンバーは葉を揉むと石鹸のように泡立つことによるという．平野 [10]（1984 年）と武藤 [18]（1989 年）の調査で，屋古の神ウスイで「ノロはススキ・アザハ・マンモクの葉を束ねたもので前列の神女の肩を軽く叩く．」とある．これらの祭祀植物には霊力があり，ウンジャミ 1 日目に神迎えをするが，神女の霊力が改められるにはこの時点ではないか，としている．8 月 18 日の調査当日は，アザハと称する植物は確認できなかったが，マンモクは沖縄の植物方言からしてクスノハカエデのことだろう [19]．塩屋湾のウンガミ実施委員会（2008 年，ウグヮンマール）と大宜味村教育委員会（2009 年，ウドィマール）が企画した DVD で確認すると，ノロが持つ祓いの束はススキとクスノハカエデの 2 種で，ススキはシジキ（2009 年），クスノハカエデは 2DVD ともアザハバーと説明されている．

図 12　祓いに使うススキとクスノハカエデの束
（屋古 2019 年 8 月 18 日）

図 13　クスノハカエデ（田港 2019 年 10 月 18 日）

図 14　3 艘のハーリー舟
（田港・屋古海岸 2019 年 8 月 18 日）

DVD でノロの所作をみると，ノロは持った祓いの束で，正座して伏し拝んでいる 3 名の女神人の背中を後方から叩く．叩く順序は，ノロ側から 2008 年が中―右―左，2009 年が中―左―右で，3 名の女神人のうちまずまん中で左右の区別はないようである．ススキとクスノハカエデの束によるノロの叩きの祓いは，霊力の授与もあろうが，後述するように『おもろそうし』に「‥精高子が‥あざか　がね　留めば‥」とあり[20]，霊力のある草木は威力を持ち，首里王府の神女組織の統一による権威の儀礼の一つが考えられる．

14:00　屋古―田港間の海岸から，ハーリー舟が 2 度，1 度目の舟は小さく，先導―舵取り―声掛けとこぎ手 10 人ほど，2 度目の舟は大きく，漕ぎ手が 20 人ほどで，各 3 艘ずつ出発する．ハーリー舟の出発式を見て，他の事情により今回の調査を終了することにした（図 14）．福地氏によると，ハーリーの後は塩屋のカニクバマで女神人たちは西に向かって拝むという，DVD でもその様子が確認され，男 2 人が二叉の槍状の棒で海辺にイルカを獲る仕草をする．

3. 古宇利島ウンジャミの祭祀植物 リュウキュウボタンヅル

古宇利島の地層は琉球層群の石灰岩[21]で，琉球列島の島嶼群の低島[22]に属する．ウンジャミの最初の御願が行われるカミアサギの周囲の植物を観察すると，オオバギ，ハマビワ，クワノハエノキ，ヤマグワ，リュウキュウガキ，クスノハガシワ，ニガキ，フクギ，ミフクラギ，オオムラサキシキブ，トベラ，マサキ，クロツグ，トウツルモドキ，ハマサルトリイバラ，リュウキュウソケイ，カラスキバサンキライ，ハスノハカズラ，リュウキュウボタンヅル，クワズイモなど，隆起サンゴ礁地の植生にみられる一般的植物が生育する．

ウンジャミのハーブイに使われるリュウキュウボタンヅルは林縁，また家屋や畑地の石垣，柵，生垣を覆うように生えている（図 15）．

図 15　ⓐリュウキュウボタンヅル（今帰仁村古宇利島 2018 年 9 月 4 日），ⓑ同花（本部町渡久地 2019 年 8 月 15 日），ⓒ同果実（うるま市楚南 2019 年 7 月 31 日）

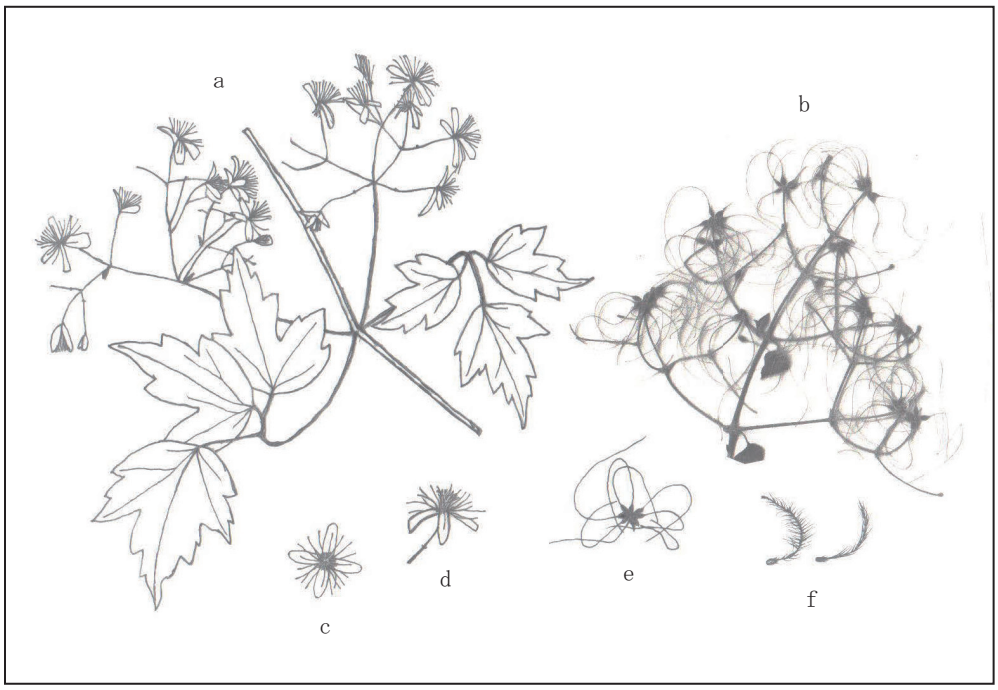

図 16　リュウキュウボタンヅル　a集散状の花序，b 痩果の集散，c–d 花，e 集合果，f 痩果

図 16 にみるように，7 月頃集散する花序が花火のように一面に 4 弁の白い花を咲かせ(a，c，d)，祭祀の時期にはほぼ散ってしまうが，まだ少し花をつけているものもある．花後の実は多くまとまり(b，e)，一個一個の痩果は有毛で花柱も長く伸びて黄白色～白色の長い羽毛を密につける(f)．花も実も多数で全体として賑わいを見せる．一般に花と果実の時期は比較的長いが場所や個体によって差があり，ほぼ夏中見られる．この島に生まれ生活している玉城善春氏(昭和 9 年生)の話では，ウンジャミの頃にはほとんど花期は過ぎていて，ハーブイにするのはとくに花の豪華さには関係ないという．

基本種のボタンヅル(*Clematis grata* Wall.)は，ヒマラヤ～中国，台湾に分布する [23, 24]．リュウキュウボタンヅル(*Clematis grata* Wall. var. *ryukyuensis* Tamura)は，琉球の固有変種で琉球各島に広く分布し [23]，主に低地に生育する．リュウキュウボタンヅルによく似た日本のボタンヅル(*Clematis apifolia* DC.)は本州～九州，朝鮮・中国の暖帯より温帯にかけて分布し [24]，長沢 [25]によると，和名は「牡丹蔓」で，葉がボタンの葉に似て，蔓性の草であるところからの名である．方言名は，クツブサ(高知)，クツワズル(岩手)は馬の口輪をこの蔓で編むから，シャボングサ(長野・新潟妙高)は木の葉を揉むと泡が出るから，チャカズラ(島根)，ナベカラマリ(宮城)，ネコカズラ(鹿児島)があり，ワクデ(山形)とワクノテ(宮城・山形・秋田)は花の後の毛の形から，その他モエンザ(佐渡)がある．岩手県遠野周辺では，この蔓を使って馬が道草を食わないようにするために「口輪」を手作りで編み，長野県から新潟県にかけての子どもたちは，ままごとの遊びに，この草の葉を採って水の中で揉んで泡立て，石鹸だと言って遊ぶという．

琉球の方言名は天野 [19]から，モメンヅル？(喜界島)，チートゥミグサ(沖縄辺戸)，ミンバイグサ(沖縄饒波)，マヤーヤンジャ(沖縄真喜屋)，サフングサ(沖縄漢那)，ブクブクーグーサ(沖縄首里)，アーブクギ(久米島)，スバカマフサ(宮古島)，スバカマギー(伊良部島)，ホーイフシャ(多良間島)，シルシカッチャ(石垣大浜)，カンニカジラ(竹富島)，ナーラカッチャ(黒島)，ミパグサ(波照間島)がある．アーブクギ・ブクブクーグーサは何れも揉めば泡が出る草，サフングサはサボン(石鹸)草，ミンバイグサはものもらいに効く草の意でそれを患ったとき，この植物の茎を10 cmくらいに切って一方の切口より吹いて出た樹液を点眼することに由来する． 筆者の一人新里も幼年の頃，その葉を揉んで泡を出し，石鹸のようにして遊んだ(図 17)．古宇利島ではハーブイグサ(玉城氏)またピーピーカンジャの名もある [15]．以上の方言名に加えて，リュウキュウボタンヅルをカーブイグサと呼ぶうるま市伊計島では蜘蛛もカーブイと呼び，その関連性は不明であるが [26]，古宇利島でも蜘蛛の巣をガンガンカーブイと称するらしい(玉城善春氏)．

うるま市 4 島のハーブイに用いるナガバカニクサ，ハマサルトリイバラ，カラスキバサンキライ，リュウキュウボタンヅルは茎や葉などの形態から竜蛇信仰に起因するものと推考された [26]．リュウキュウボタンヅルの茎が垣に沿って伸びていく形，葉や花や実の形は，竜が空を飛行する姿を思い起こさせるものとなろう(図 15, 16)．また，エリアーデは [27]樹木が宗教的対象となるのは，その力によるもので，樹木が聖なる力を分担しているとするなら，つねに成長し再生するゆえであり，樹液を出すからであり，全アフリカとインドでは，樹液の多い木は神的母性を象徴すると説いている．ガジュマルのハーブイの意義の一つにその母乳に似た樹液が考えられたように [3]，リュウキュウボタンヅルの泡に因む方言名は各地にあり，本種の祭祀植物の意義を示しているのものではないかと思われる．日本で，同じセンニンソウ属のセンニンソウ(*Clematis paniculate* Thunb.)の“仙人草”の名前の由来は不明であるが [28]，その名は植物全体の形，樹液，また痩果の白毛などが関係していることも考えられよう．リュウキュウボタンヅルの祭祀植物の意義は，竜蛇信仰の他に泡状の樹液が含まれそうである．

図 17 リュウキュウボタンヅルの茎葉を水中で手で揉んで石鹸泡を出したもの

他方，神人が持つ棒について，新城徳祐(1958 年調査)[8]は，13 人の神人が弓をもって踊るが，弓は長さ 6 尺 5 寸で材はダシキャー—とあり，また海神祭には，ダシカの棒の先に約 2 尺 5 寸位の竹をくくりつけ唐船の形を書いた旗を下げ，樫の棒は所々白紙の紙幣を縛っている，と記録している．

仲原ら [13]は，新しい女神人は弓の代わりにデーク(ダンチク)を持ち，来年から唐船の描かれた弓を持つと記載している．平敷も [29]，ウンジャミの司祭は 13 人の女神人，4 人の男神人ときまっていて，アサギ庭でノロはじめ女神人がヌミ(弓)を持つが，ヌミは 2.5 m 位のダシチャ木(シマミサオ)の棒である，と記述している．

ヌミ(弓)の材については，樫材が多いといい [15]，今帰仁村史は [30]樫であるが決まりはないと記しつつ同史書『古宇利の海神祭』の項では 8 尺位のダシチャ木(シマミサオ)とある．玉城善春氏によると，弓にするダシチャーは銛の柄や棒にも使い，戦前は山原からくる薪材と芋と交換した，赤瓦家を壊すときに材木に樫材があり，それを使った，棒は旗を立てるソウ(棹)ともいい，戦後は製材所からラワン・アピトンの南方材を求めて使ったという．ただ筆者(新里)の経験で，シマミサオノキは杖材に重宝するが棒に用いることを聞かない．新垣ら [31]は，『沖縄の祭具—草冠』で新城 [8]の調査を採用して，ヌミはダシチャ木で調査をまとめているが，赤嶺 [32]は同報告書で『上江洲均：沖縄の暮らしと民具，1982』から，与那国島にはシマミサオノ木で作るダシカグサンという杖があり，また病魔退散の祈祷でダシカ・クディもあり，呪術用語としてダシカ・グサンとダシカ・クディがセットになっ

ているのは要注意である，としている．

アカネ科のシマミサオノキ（*Randia canthioides* Champ. ex DC.）は，沖縄島の山原や与那国島の山地の自然林に産する常緑小高木で，材は張剛ですこぶる弾性に富み把柄材・杭材・垂木・杖に用いられるが [33]，自然林における本種の立木は点在し，一般に杖用の大きさのものが多くみられ銛の柄や茅葺きの針に使われる [34]．玉城善春氏談によると，ヌミにするダシチャ木は銛の柄にも使うというのでシマミサオノキの可能性があるが，材が堅くあるいは弾力性があり棒・銛・櫂・柄などにする木は他にオキナワウラジロガシ，オキナワシャリンバイ，アデク，シキミ，シロミミズ [33]などがあり，さらに考究する必要があろう．

4. 塩屋湾ウンガミの祭祀植物クスノハカエデ

大宜味村史（通史）[12]によると，屋古アサギで，アシビ神はハーブイ（野シランを蒸して乾燥させて竹の輪に垂らして結んだ冠）をかぶり，ヌルも白衣裳に着替え頭にチヌマキ（つる草でつくった冠）を乗せて，マガ玉をかけカンザシをさし，神ウスイ，若ヌル，大勢頭，スリ神の 3 人が山の方に向かって手の甲に額を乗せ深く拝むように地面にうつ伏せになるとヌルが祈願した後一人一人ススキの束（アザハ葉とジジキ）で背中を叩く，とある．既述したように，今年は例年の祓いの所作がなかったが用意していた束からイネ科のススキ（*Miscanthus sinensis* Anderss.）とカエデ科のクスノハカエデ（*Acer oblongum* Wall. ssp. *Itoanum* (Hayata) Hatusima）が確認された（図 12）．今年はヌルの頭のチヌマキはなく，祓い束の中のアザハ葉も何をさすのか分からなかった．平良の写真版 [35]で，白装束の女神人の持っている祭祀植物は「ススキとボチョウジの束を持つヌル」とあるが，ハーブイはノシランの他にチヌマキはなく束はおそらくススキとクスノハカエデであろう．

塩屋湾の周辺の地質は低地が国頭層群の砂岩，緑色岩，ネクマチヂ辺りの山地が本部層の石灰岩・国頭層群の砂岩・千枚岩 [21]とあり，また大宜味村の地質概要 [22]によると，主に古生代二畳紀と考えられる石灰岩（本部層），中生代と推定される緑色千枚岩～緑色片岩（名護層），黒色千枚岩（名護層），新生代古第三紀の砂岩と砂岩泥岩互層（嘉陽層）からなる．従って本域には，沖縄島の特徴ある植生と植物がみられ，大宜味村植生図 [36]から，低地林から山地林にかけてイタジイ二次林，非石灰岩地のリュウキュウマツ林，石灰岩地のリュウキュウマツ林，石灰岩地の常緑広葉樹林が分布し，植生は [36]，海岸や低地から山地まで多くの植物群落が認められている．

主として祭祀植物に関する森林の主な植物をみると，非石灰岩地域の常緑広葉樹林はイタジイを優占種としオキナワウラジロガシ，タブノキ，イスノキ，アデク，シマミサオノキ，ボチョウジ（リュウキュウアオキ），イヌガシ，オキナワサルトリイバラなど，古生層石灰岩地域の常緑広葉樹林は林冠部の樹種数が多く，クスノハカエデ，ガジュマル，ハマイヌビワ，タブノキ，ヤブニッケイ，イスノキ，シロダモ，アマミアラカシ，ビロウなど，高木層以下にリュウキュウガキ，トベラ，ナガミボチョウジ，クロツグなど，ツル植物にサツマサンキライ，カラスキバサンキライ，タイワンクズ，トウツルモドキ，カニクサなど，草本層にノシラン，ミナミタニワタリなど，多くの植物種が分布し出現頻度も高い．また禾木・草本群落は，ススキ，チガヤ，タイワンクズ，リュウキュウボタンヅル，カニクサなど，さらにリュウキュウマツ群落が茂り，ヤブニッケイ，ハマヒサカキ，クロツグ，ボチョウジなどが出現する．

森林植生を構成する植物から，祭祀植物に用いられるノシランやクスノハカエデは身近なもので，これまでの記載にあるノロの持つ束のアザハバーがボチョウジあるいはナガミボチョウジとしてもその採取は可能であるし，ハーブイのチヌマキがナガバカニクサあるいはトウツルモドキ，リュウキュウボタンヅル，またサンキライ類としても得やすいものである．

クスノハカエデの方言名は天野 [19]から，マンク（永良部），マンクギ（永良部，与論），マニク（沖縄辺士名），マムフ（沖縄饒波），マンムフ（沖縄田港），アーカブランギー（沖縄真喜屋），マホーフギ（沖縄諸志），ムホーフ（沖縄具志堅），マミク（沖縄漢那・幸喜・首里・知念・南島八重垣），マーミク（沖縄知花），ブクブクギー・マミカ（沖縄首里），サフンギ（久米），マモク（沖縄林政八書）があり，ブクブクギーはその葉を水中で揉むと泡が出る状態を言い，サフンギは同様な状態から石鹸の木の意である．

塩屋湾域の植物方言名は，ススキがグシチ・ジシキ・シバ，クスノハカエデがマンモク・セッケンバーである．グシチは沖縄の一般名で，セッケンバーは葉を揉むと石鹸のように泡立つことによるという．前述したように平野 [10]と武藤 [18]は，屋古の神ウスイでノロの持つ束はススキ・アザハ・マンモクとあり，石川 [37]も「・・ヌルが山に向かって拝んでから，若ヌルが取ってきたススキとアザハともう一種類の計三種の葉を束ねたものを持ち，・・」と記載しているが，もう 1 種の具体的な記録や写真がなく，宮城 [38]は「・・アザハバー（ボチョウジ）とジジキ（ススキ）を束ねたもの・・」，名護市 [39]はアザハと薄，と記述している．大宜味村教育委員会の DVD と今回の調査では用意されていた束はススキとクスノハカエデの 2 種で，既存報告は方言名アザハが祓い束の植物名や種数に混乱を招いているのではないかと思われる．

クスノハカエデは常緑性で対生葉序（図 18）の性質から祭祀植物の合掌型（十字対生型）に属し [40]，国頭村比地区のシヌグは女神人がハーブイにノシランとクスノハカエデを用い，かつてはノシランは海の神，クスノハカエデは山の神に使い分けていたという [40]，また以前は国頭村奥区もクスノハカエデを使ったといわれる [34, 40]．塩屋湾のウンガミはノシランだけハーブイにし，クスノハカエデはススキと 2 種で束にして祓いに用いる．

関連文献をみると，外間 [20]の『おもろさうし』第十三巻 763 に「また　鳴響む精高子が　八重座杜　ちよわちへ　あざか　がね留めば　十百末」は，校注に「あざか・がね：アザカ（琉球青木の古名）とゲーン（すすき）．ともに霊力のある草と考えられていた．」としている．天野 [19]には○ボチョウジ（リュウキュウアオキ）・ナガミボチョウジ；アサカ（沖縄，おもろさうし・真珠湊碑），アザカ（沖縄，おもろさうし・辺野古・旧記録），アザマギ（沖縄，田港），アザマバー（沖縄，田港），ハブイギー（沖縄，屋古），○クスノハカエデ；マンムフ（沖縄，田港），○ススキ；アザハ（奄美大島，名瀬・大和），ジジキ（沖縄，饒波・田港），シバ（沖縄，琉球

図 18 クスノハカエデの対生葉序

国由来記＝柴）がある．

多和田 [41]はアザカガネとアザカ・アダカについて多様に解説している．要所を概説すると，大宜味村田港にはアザマバーとアザマギがあり，屋古ではそれをハブイギー（発表当時はハーブイに使用していない）といい，田港は厄日を除くためにアザハバー（リュウキュウアオキ）2 本とヂヂキ（ススキ）1 本合わせて神に供えて拝む，久高島ではアダカは神の庭木でボチョウジが生育する，アザハ（アザカ）の名をもつ植物にススキがあり，次段落の金久論から奄美では「アダハ」とはススキ 3 本を十字に交差させた 1 束の意であろうという．普通ゲーンはススキの葉を十字（サン結び）に束ねたものであるが，魔除けや祭具になるもの全部の総称がアザカで，その一つにゲーンが包含される．座間味村ではボチョウジはススキとともにハブイに使うのでゲーンギーというがアザカを知る人はなく，アザカとゲーンが一つであることを物語っていようという．もともとアザカという特定の植物はなく，ボチョウジは十字対生葉序がアゼて見えるのでアザカと称し，ススキは十字に結んでアザカと称しただろう，と提唱している．

金久 [42]は，奄美大島の水祭りではシュク（しとぎのなまり）と称して，米の粉を水でこねたものを椀に入れ，これにアダハと称するススキ 3 本を束ねたものを河泉の岸に立て，線香を立てて拝む．アダハという語を考えると，方言で“アデ”というと交差または十字路のことで，“アデュル”といえば十字にする，交差させるの意で，“アダユル”は交差する，十字になるの意であるとして，「アダハ」とはススキ 3 本を十字に交差させた一束の意であろう，と結語している．

金久はまた同書に，柴といえば奄美では特に椎の木の枝葉をいうが，“柴差し”のシバはススキの意味をもち，ススキには邪神を祓う呪力があり，このような呪物をアデ（十字型）にして置くことや，門口や家の四隅に挿し立てて，タブー的力があると信じられていた，と記している．小野 [43]は，奄美の加計呂麻島の須子茂部落では旧四月中壬のオホリの祭りで，神役たちはアザハというススキの葉をネリヤ・カナヤの神を送るといって海の方へ投げすて，同じ加計呂麻島で昔あった祈祷の行事でも神役たちはアザハ（ススキの葉）を使ったと記述している．

これらの記載から，アザハ・アザカは霊力のある植物の総称と思われる．祭祀に用いられるアザハは一般に，草の葉を十字のサン結びとし，あるいは十字対生葉序の樹木である．シバも同様に霊力のある植物の総称で，柴の神という柴とはシイ，カシなど照葉樹の枝を立てて祭るからといい [43]，一般に祭祀場所のヤマの主として生い茂る代表的な常緑性の草木種であると思われる．従って，塩屋湾ウンガミの祓い用いる植物の束は 2 種で，ボチョウジは実見された記録がないので祭祀植物としては不明で，アザハとシバの実体はススキとクスノハカエデの入り交じったものと推察される．

5. ウンジャミ及び祭祀植物の流れ

新城 [8]の 1956 年の調査記録に，「勝連村比嘉に長男は行き，次男が郡島に残った．其の子孫が代々郡島の国造りをした．其の家を比嘉家（ヒガヤー）と言う．村の行事のある時は，その家を最初に拝む．国造りの後，郡島から比嘉家の長男が勝連比嘉島に渡って比嘉の部落を創設した」とあり，背景には航海術に長けた人が多く琉球船に乗り込んで交易していたと想像される勝連浜比嘉島 [44]と互いに海上の小島である古宇利島との舟航の結びつきがあった歴史を物語っていると思われる（旧勝連村は現在うるま市に統合）．海運で互いの文物を交流しながら，比嘉部落のある浜比嘉島にはシヌグがあり，古宇利島にはウンジャミとなり，異なる祭祀が行われている．もともとシヌグとウンジャミはほぼ同時に起こったのか，時代を違えて発生したのか，あるいは系列が異なるのか，さらに生態史的展開からシヌグを照葉樹山地型の祭りウンジャミを海洋性平地型の祭りに分類したり [45]，様々な見方があるが，多くの村落では交互に行われることが多い．

浜比嘉島シヌグの祭祀植物はカーブイのナガバカニクサであるが [46]，聞き取りの最初はリュウキュウボタンヅルらしいとの話があり，伊計島シヌグのカーブイは古宇利島と同じリュウキュウボタンヅルである [26]．うるま市 4 島の浜比嘉島・平安座島・宮城島・伊計島のシヌグ祭祀は浜比嘉島に始まるとされ [26]，新城 [8]の調査から，古宇利島の比嘉家と浜比嘉島の比嘉区との関係がみられ，これら 4 島と古宇利島の文物交流が察せられる．

しかしながら，浜比嘉島にはアマミチュー・シルミチューが祀られ，古宇利島には人類発祥地の神話があり，両島ともそれぞれが琉球開闢の島と謳う．また琉球開闢の事は [47]国頭村辺戸安須森，知念村（現南城市）斎場嶽・久高コハウ森などもその名が知られ，「沖縄の各地に伝えられている伝承では，それぞれの字がほとんどと言っていい程，特に神人達は『我が島こそ宇宙の中心だ』という伝承を持っている事が多い」といわれる [48]．古宇利島と浜比嘉島の生い立ち，さらに琉球開闢の神話と沖縄の村落の成り立ちおよび祭祀の歴史には，その経緯の時間また質的次元が異なるのかいろんな視点で考察する必要があろう．人類発祥の神話のある古宇利島の神人が，ウンジャミ祭祀に塩屋湾に向いて御願するのも紐解かねばならない課題であり，沖縄のウンジャミ祭祀の起こりや経緯をみるにはシヌグ祭

祀を絡めて統合的に考察しなければならないだろう.

方言名から, 古宇利島―塩屋湾―伊計島の間にはリュウキュウボタンヅルを通して祭祀植物のカーブイ(ハーブイ)と昆虫のクモ(および巣)とは何らかの関係があるような気がする. リュウキュウボタンヅルは古宇利島でハーブイグサ, 伊計島でカーブイグサであるが, クモの巣は古宇利島でガンガンカーブイ, 伊計島でカーブイと称し, 塩屋湾屋古でアサギの庭に張る藁で編んだテント様の幕をクムーと呼ぶのはクモのことで, いずれも祭祀のカーブイ(冠)に用いるリュウキュウボタンヅルとクモの巣の関係を示唆しているようである. 中国では [49], 「瑞祥としてのクモ」の図案に「喜従天降」があり, クモが巣から長くぶら下がっている図でクモの巣は天をそれから垂れ下がるクモは喜を意味する. 吉祥図案には「天中集瑞」「喜気盈門」もあり, クモの糸は細いけれども粘りがあり, 離別をともなう人と人の縁を強く結ぶ力を持ち, 今生の現実の世界と富貴・不老・神秘・仙界を結ぶ力を持つと信じられていたという. クモの巣が祭祀的意義を有するとすると, リュウキュウボタンヅルは, 茎が他物に網目のようにかみついて伸長する性質と葉が3出状で小葉がやや 3 脈になる様子がクモの巣に似ることが祭祀植物の由縁とされるのか, 今後の調査に託したい.

祭祀植物としてのリュウキュウボタンヅルとクスノハカエデの共通点は, 常緑性で対生葉序をもち葉または小葉の葉脈が掌状脈状の 2～5 行脈を有する(図 16, 18)特徴があるが [26, 40], さらに民俗的に 2 種とも葉を水中で揉むと泡が出る(図 17)ことが結びつく. 今回クスノハカエデは葉を水中で揉んで試行しても明らかな泡が認め難かったが(図 19), 方言名ブクブクギー(沖縄首里), サフンギ(久米), セッケンバー(塩屋湾)からその泡を民俗としたことが認められよう. リュウキュウボタンヅルとクスノハカエデの対生葉序, 掌状脈, 泡(液汁)の共通性, そしてクモがどのような祭祀的意義があるか, ノシラン・ヤブランも媒介として村落間にどのように関わりがあるか, 古人の自然観と土着信

前述したように,『おもろさうし』763 に [20], 「又聞得大君ぎや屋良座杜　ちよわちへ　だしきや釘　差しよわちえ　十百末　又仰のつながりが潜んでいるような気がする.

図 19　クスノハカエデの葉を水中で揉んでみたが, リュウキュウボタンヅルのようなはっきりした石鹸泡は出なかった

鳴響む精高子が　八重座杜　ちよわちへ　あざか　がね　留めば　十百末」があり, ダシキャとアザカの解明は琉球の祭祀民俗の歴史にとって重要な視点になると考えられる. 祭祀植物として, アザカ・アザハが一般的に呼称されていると考えられるように, ダシキャ・ダシチャもシマミサオノキに限定されるものでないこともありうる.『おもろさうし』の霊力のある植物, アザカとダシキャが一般的呼称とすると, 各村落のシヌグやウンジャミにまつわる歴史や謂れは, 例えば国頭村安田区シヌグの今帰仁城主, 伊平屋田名ウンジャミの喜界島のノロ, 浜比嘉島の南山の武士, 今回の古宇利島ウンジャミの塩屋との関係など, 琉球王府の祭政統一の政策と関連した付会の想定が考えられよう.

琉球開闢の神の島とされる久高島は漁民の島でもあり, 琉球各島との交易が行われ, 島々の村落の民俗行事に及ぼす影響が大きかったに違いない. 久高島のイザイホー祭や年間行事は,『おもろさうし』に記載される祭祀植物, さらに土着信仰としてのシヌグ・ウンジャミの歴史を探求するのにきわめて重要な事象が内包れていると思われる. 続けて, 久高島の祭祀植物を調査したいものである.

古宇利島ウンジャミは近年に渡って本質的な変化はないというものの [14], 神人は 1963 年(昭和 38)女 13 人・男 3 人から 1989 年(平成元)女 6 人・男 3 人, 今年は女神人 5 名, 男神人 2 名である. 神人の減少は本行事に多大な影響を及ぼし, 神人の継承がその存続の大きな問題であるとされ [14], また現在は神人の持つ棒の材料はダシカや樫が店で売られる一般的な木材になり, 棒について明確な話が得られない状況にある. 今年の塩屋湾のウンガミはノロが不在で, 屋古アサギでのヌルの神ウスイが省略され, ススキとクスノハカエデの束の祓いがなく, 全体の行事内容もずいぶん簡素化された感がある. おそらくその大きな原因はノロやその他の神人の継承が途絶えつつあることによるだろう. シヌグとウンジャミ祭祀が行われている他の村落でも, 同じ状況にあるといえる. 無形民俗文化財の保存, 取分け祭祀関連の年中行事については, それを担う人・神人の継承が重要な条件であると思われるが, 祭祀組織の再構築や村落・地域の関わり方などその利活用も併せて, 行政や関連機関の積極的な支援また共同が必要だろう.

今回の調査も, 地域の年間行事を継承している公民館等の機関やそれを支えている方々のご懇切な協力があった. 今帰仁村古宇利島の玉城善春氏, 大宜味村塩屋区自治会長の知念　章氏, 屋古区の福地保善氏, 田港区の当山全信氏, 村教育委員会職員, および聞き取りや行事への参加を許していただいた神人や区民の方々に厚く感謝申し上げる.

文献

1)　新里孝和・芝　正巳「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅰ)」2014 年 a, 琉球大学農学部学術報告, 第 61 号, 55-66

2)　新里孝和・芝　正巳「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅱ)」2014 年 b, 琉球大学農学部学術報告, 第 61 号, 67-78

3) 新里孝和・芝　正巳「沖縄・伊平屋村田名のウンジャミ祭祀の祭祀樹木としてのガジュマル」2017 年，琉球大学農学部学術報告，第 64 号，55-63
4) 国頭郡教育部会「沖縄県国頭郡志」1967 年（3 版，1919 年初版），沖縄出版会，沖縄
5) 竹中理三・編「角川日本地名大辞典」1986 年，株式会社角川書店
6) 下中直人・発行「日本歴史地名大系第 48 巻　沖縄県の地名」2002 年，株式会社平凡社
7) 東恩納寛惇「南東風土記―沖縄・奄美大島地名辞典―」1974 年（初版 1950 年），沖縄郷土文化研究会・南島文化資料研究室，沖縄
8) 新城徳祐「新城徳祐資料―調査記録ノート―（1956 年の調査記録）」2001 年，なきじん研究 10，今帰仁村歴史文化センター，今帰仁村教育委員会，沖縄
9) 中林照明「古宇利島のウンジャミ（1989 年調査）」（高岡薫・秋山紀子・武藤美也子・神野富一「沖縄祭祀の研究」）1994 年，株式会社翰林書房，p62－84，東京
10) 平野祐二「塩屋のウンジャミ」（高阪薫編「沖縄の祭祀―事例と課題」）1987 年，株式会社三弥井書店，p344-358，東京
11) 大宜味村役場企画観光課「大宜味村村政要覧」2017 年，大宜味村，沖縄
12) 大宜味村史編集委員会「大宜味村史，通史編」1978 年，大宜味村，沖縄
13) 仲原弘哲・石野裕子・金城寛樹「古宇利の海神祭（ウンジャミ）」1996 年，なきじん研究6『すくみち』（第 26 号～29 号），今帰仁村歴史文化センター，沖縄
14) 仲原弘哲「古宇利の海神祭―歴史的な視点から―」1992 年，なきじん研究2『すくみち』（第1号～16 号），沖縄県今帰仁村教育委員会歴史資料館準備室，沖縄
15) 大城　學「古宇利島の祭場と儀礼」（県立博物館総合調査報告書Ⅷ―古宇利島―）1991 年，沖縄県立博物館，沖縄
16) 湧上元雄・山下欣一「沖縄・奄美の民間信仰」1979 年（第二刷），株式会社明玄書房，東京
17) 初島住彦・天野鉄夫『増補訂正　琉球植物目録』1994 年，沖縄生物学会
18) 武藤美也子「大宜味村塩屋のウンガミ（オドイマール）1989 年調査」（高岡薫・秋山紀子・武藤美也子・神野富一「沖縄祭祀の研究」）1994 年，株式会社翰林書房，p62－84，東京
19) 天野鉄夫「琉球列島植物方言集」1979 年，新星図書出版，沖縄
20) 外間守善「おもろさうし（下）」2017 年（第 4 刷），株式会社岩波書店，東京
21) 木崎甲子郎・編著「琉球弧の地質誌」1985 年，沖縄タイムス社，沖縄
22) 神谷厚昭「大宜味村の地形と地質」（大宜味村の自然）1995 年，大宜味村教育委員会，沖縄
23) 初島住彦「琉球植物誌（追加・訂正版）」1975 年，沖縄生物教育研究会，沖縄
24) 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫：編「日本の野生植物，草本Ⅱ，離弁花類」2000 年（新装第2版），株式会社平凡社
25) 長沢　武「野外植物民俗事苑」2012 年，株式会社ほおずき書籍，長野
26) 新里孝和・芝　正巳「沖縄・うるま市4島の祭祀植物」2018 年，琉球大学農学部学術報告，第 65 号，147-158
27) Eliade Mircea「大地・農耕・女性―比較宗教類型論―」（エリアーデ著・堀一郎訳）1970 年（第 2 刷），株式会社未来社，東京
28) 牧野富太郎「新日本植物図鑑」1968 年（第十七版），株式会社北隆館
29) 平敷令治「沖縄の祭祀と信仰」1990 年，第一書房，東京
30) 今帰仁村史編纂委員会「今帰仁村史」1975 年，今帰仁村役場，沖縄
31) 新垣則子・佐藤宣子・本永　清「沖縄の祭具―草冠」（「沖縄県文化財調査報告書 151 集　沖縄の信仰用具に関する総合調査報告書」）2016 年，沖縄県教育庁文化財課・沖縄県教育委員会，沖縄
32) 赤嶺政信「沖縄県における信仰用具に関する概観」（「沖縄県文化財調査報告書 151 集　沖縄の信仰用具に関する総合調査報告書」）2016 年，沖縄県教育庁文化財課・沖縄県教育委員会，沖縄
33) 天野鉄夫著・澤岻安喜写真「図鑑　琉球列島有用樹木誌」1989 年，有限会社沖縄出版，沖縄，
34) 新里孝和・木下義宜「国頭村奥の植物方言」2012 年，名護博物館紀要「あじまぁ」16，沖縄
35) 平良孝七：撮影「塩屋・ウンガミ，沖縄県大宜味村塩屋ウンガミの記録」1986 年，塩屋ウンガミ刊行委員会，沖縄
36) 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋　曠・大嶺　徹・西銘盛光・日越国昭・佐久本敞「大宜味村の植生」（大宜味村の自然）1995 年，大宜味村教育委員会，沖縄
37) 石川浩之「第二章　塩屋湾のウンガミ」（大宜味村史「民俗編」）2018 年，大宜味村教育委員会，沖縄
38) 宮城竹秀「塩屋のウンガミ（海神祭）」（平良孝七：撮影「塩屋・ウンガミ，沖縄県大宜味村塩屋ウンガミの記録」）1986 年，塩屋ウンガミ刊行委員会，沖縄
39) 名護市史編さん室「名護市史叢書・15　やんばるの祭りと神歌」1997 年，名護市教育委員会，沖縄
40) 新里孝和「沖縄シヌグ神祭の植物観」2013 年，名護博物館紀要「あじまぁ」17，沖縄
41) 多和田真淳「古琉球の祭具＝アザカガネとダシチャクギ＝」1963 年，「沖縄タイムス」1963 年 11 月 3 日～14 日，沖縄
42) 金久　正「増補・奄美に生きる日本古代文化」1978 年，至言社，東京
43) 小野重朗「神々の原郷―南島の基層文化―」1977 年，財団法人法政大学出版局，東京
44) 福田恒禎；編集「勝連村誌」（第五編交通　第二章海上交通　第一節古代）1966 年，勝連村役所，沖縄
45) 小野重朗「南日本の民俗文化Ⅵ　南島の祭り」1994 年，

(株)第一書房, 東京
46) 新里孝和・芝　正巳「沖縄・うるま市, 浜比嘉島のシヌグ植物のナガバカニクサ小論」2016 年, 琉球大学農学部学術報告, 第 63 号, 77-87
47) 知念村史編集委員会「知念村史　第一巻資料編　知念の文献資料」(Ⅱ近世期資料　琉球開闢の事『中山世鑑』)1983 年, 知念村役場, 沖縄
48) 遠藤庄治;コメント(討論(2)説話研究をめぐって)「福田章・湧上元雄　編:琉球文化と祭祀」1987 年, ひるぎ社, 沖縄
49) 錦　三郎「飛行蜘蛛」2005 年, 笠間書院, 東京